

震災時に地域で起こったこと

平成 24 年 5 月 29 日（火）

六郷地域包括支援センター

センター長 渡邊 美智子

1. 震災発生後、地域の女性たちに起こったこと、女性たちの動き

① 六郷地域の概要

- ・仙台市南東で、名取市・太白区に隣接
- ・人口 13,642 人（65 歳以上 3,167 人 22.93%/平成 23 年 4 月）
- ・世帯数 5,086 世帯（65 歳以上：独居 605、高齢者のみ 449/平成 24 年 4 月）
- ・小学校 2 ヶ所（六郷、東六郷）、中学校 1 ヶ所（六郷）
- ・町内会 12 ヶ所のうち、5 ヶ所の津波被害が甚大
- ・地区全体面積のほぼ 3 分の 2 は農耕地（専業農家・兼業農家）
 - －高齢者が農業、若い人が勤めている。震災後、農業はほとんど復活していない。

② 震災発生後の時系列での変化

発生直後	<ul style="list-style-type: none"> ・津波からの避難（11 日～14 日まで約 1,300 人） ・地区によって、それぞれ避難所となっている学校、また近隣の集会場などへ避難した。東六郷小学校に避難した方が孤立し、翌日ヘリコプターで地区内の六郷農協 2 階に移動した。
ライフライン復旧後	<ul style="list-style-type: none"> ・津波被害で自宅が流出及び全壊の方は、仮設住宅が完成するまで避難所生活を継続。 ・自宅に戻れる方は、日中は自宅片付け、夜間は避難所に泊まる。その後、帰宅可能な方は徐々に自宅に戻る。 ・4 月中旬には住居がない方のみが避難所に残る。
長期化する避難所生活	<ul style="list-style-type: none"> ・自宅に戻れない方がいる避難所では、各町内会の代表（町内会長など）と行政職員が中心となった会議を 4 月の連休までは毎日、その後方向性が見えてきたので 1 日おき、1 週間に 1 回などを経て、5 月に終了。 ・その間、大きな事柄は男性で検討。 ・生活面での要望が、徐々に女性から提案・要求されるようになってきた。 ・4 月中旬くらいから、男性が仕事に行くようになり、日中は女性が中心になり運営を行うようになった。 <p>【生活環境の状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■トイレ：避難所には和式しかない、仮設トイレが校庭の端にあり夜間に不安（早朝にトイレに移動時、女性 2 名が心筋梗塞で死亡。）、水が使えない時期の利用の対応 ■更衣・洗濯等：着替え（特に下着）が不足、洗濯機や干す場所・着替えをする場所の確保 ■入浴：定期的な入浴の確保（自衛隊、温泉招待）、働いている人の入浴が困難（近隣のデイサービスからの入浴の利用について打診あり）

	<p>■食事：3食とも、自衛隊などの支援が厚く、問題なく対応。3食弁当。トイレ利用回数を減らすために水分摂取量を減らす傾向あり。野菜・牛乳などの物資調達困難な時期には個人が交流ある他県の支援者から援助。</p> <p>■運動・生活範囲の低下：住環境の変化及び日常生活リズムの変化で運動量がかなり減少して機能面が低下→要介護認定受ける高齢者が増、デイサービスを利用</p> <p>■認知機能面：生活環境の単調化により、物忘れなど悪化、感情面も不安定になり、周りの避難者への影響が出てきた方もいた。福祉避難所への移動した方もいた。</p>
仮設住宅での生活	<ul style="list-style-type: none"> ・震災前の家族構成から変化 自宅・農地などが流出、栽培が困難になったこと、世帯主の死亡などで、多世代家族が高齢者世帯と子供世帯に分離。仮設には高齢者世帯が多い。 ・農業で収入を得ていた世帯への経済面での影響が大 ・仮設住宅ではプライバシーは確保される一方、人との交流や活動量が減少 区役所や区・地区社協による訪問、サロン活動 ・みなし仮設居住者への広報が十分でない。
在宅被災者の生活	<p>【震災直後】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・避難所に来なかった人は、①家が大丈夫だった人、②避難所で生活が難しい人（高齢者等） ・水が出たので、ある程度の生活は可能だった。 <p>【現在】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住宅の修理を行い、落ち着いた生活を送っている方が多い。
女性たちが復興に向けて取り組んでいること	<ul style="list-style-type: none"> ・地域によって、今後の居住する場所の選定が全く違うため、それぞれの町内会で、会議や勉強会などを開催。地域全体というよりは、「自分」がどこでどんな風に生活していくかが先決のようだ。

2 平時から必要な取り組み

- ・今回被害が大きかった地区は、代々その地域で農業を生業とし、地域コミュニティが確立されていた地区だったので、集団（避難所等）での生活でも普段の地域コミュニティが維持され、統率が取れていたように感じた。一方、日頃から地域コミュニティに参加していない人は、運営に参加するわけではなく、家族でかたまっただけで過ごしていた。
- ・何か起きたときに、住民活動を急に組織しようとしても、その場では作れない。
- ・いつ、どこで、どんな災害が、どんな規模で起こるか、予想できないことを、個人一人ひとりが認識し、日頃から助け合える近所・町内会単位などで、心情・物資・利用可能な地域資源など共有できる関係作りをする意識を持ち、相互扶助の意識を高める取り組みが必要と感じている。